

写真1 パタニ県中央モスク。建立にはタイ王室の支援があった。



■フォトエッセイ■

人が集まる喫茶店 タイ・マレーシア国境県パタニ

写真・文 真辺祐子
Yuko Manabe

タイのマレーシアとの国境県は、仏教国タイにあって人口の約80%がイスラム教徒を占める。この地域を語るうえで欠かせないのは、ここがかつてマレー王国（「パタニ王国」）のあった地であり、それ故に言語、文化、そして民族的に固有であることである。かつての王国の地理的広がりには諸説あるが、タイ側では主にパタニ県（タイ語表記ではパッタニー県）、ヤラー県、ナラティワート県の3県、および隣県ソクラー県の4つの郡が含まれるとされる。3県の人口は、197万人以上である。

喫茶店に集まり、お茶やコーヒーをすすり、タバコを吸い、友人と語らう男たちの姿は、タイ南部国境地域の風景の一つである。私にとって南部国境地域は、タイの地方都市そのものでもあるし、でもやはり他所とは違う。コンビニがあり、ショッピングセンターがあり、大学のまわりには学生街があるけれど、道端にはイヌではなくヤギがいて、いたるところに兵士によるチェック・ポイントがある。なぜならここは、時に紛争地と呼ばれる場所だからである。現軍事政権によって削減されたというこの地に派遣される軍人の数

は、2〜3万人で推移している。これに警察官と、軽武装の村落防衛ボランティアが加わり、全体で約6万人の治安部門関係者がおり、やはり存在感はある。かつての王国が崩壊したあと、1909年に正式に王国の一部がタイ側に編入されたが、タイにとっての統治と地域の民族的尊厳にはかい離があり、分離独立を目指す武装組織が存在している。

この地域では、過去12年8カ月で6745人が治安に関連する事件で死亡したという統計もある。人の死を数字で把握することは時に私たちの感覚を麻痺させるが、この紛争は武力の使用がない平和状態が長く続く、強度がゆるやかな紛争であり、暴力によって深刻な影響を受ける人がいる一方で、街には驚くほど穏やかな時間が流れている。紛争という言葉は域外の人を遠ざけるが、そこに生活する多くの人の日常は、平穏に、そしてあたり前に、過ぎていく。

街中によくあるタイプの喫茶店を見渡すと、客は男性ばかりであることに気づく。「決して来ることを禁



写真2 「コーレ」と呼ばれるマレーの伝統的な柄を施した船。色彩が美しい

じている訳ではないけれど、女の人は子どもの世話や家事で忙しいから」と友人はいう。まずは、この伝統的なタイプの喫茶店から紹介していきたい。今回私が訪れたのは、パタニ県にある「ウェーマ・ロティ」である。「ウェーマ」は恰幅の良い店主のおじさんの名前（写真3）、「ロティ」というのは、マレー語でパンの意味で、小麦粉をこねたタネを丸めて、それを器用にくるくると回しながら薄くのばし、生地を豊んで鉄



写真3 「ウェーマ・ロティ」店主。テーブルの上に積んであるのは、ニッパ椰子の葉から作られた、「ヤー・セン」というタバコの葉を巻くもの。タイの他地域でもみられる



写真4 ロティの作り方(1) 薄く生地を伸ばす匠の技



写真5 ロティの作り方(2) 焼き目がついて、ぶくっとなったら出来上がり



写真7 「ウェーマ・ロティ」の店内の様子



写真6 完成したカレーのロティと看板娘

板で焼いたものである。油をたくさん使い、揚げるように焼いていく(写真4、5)。南部だけでなく、タイ全土でポピュラーなおやつである。これに、バナナを入れて焼いたものや、ひき肉を入れたもの、カレーをつけて食べるものなどがある。「ウェーマ・ロティ」は、移転した現在の場所で10年近く営業を続ける繁盛店だ。

飲み物のメニューを聞いて興味深かったのは、「コピ」(マレー語のコーヒー)が挽いた豆を布で濾すコーヒーであり、「ガフェー」(タイ語のコーヒー)が指す

のがインスタント・コーヒーであることだが、コーヒーとしての新旧の違いからなのか、理由はよくわからない。ちなみにメニューを書いたものはなく、こなれた感じで注文するのは初心者には難しい。同様に、「テー」(マレー語の茶)と、「チャー」(タイ語の茶)も使い分けている。「テー」は、基本のお茶にミルクと砂糖を入れるもの、または砂糖のみを入れるもの(=「テー・オー」)、「チャー」はタイ全土で飲まれるタイ式のアイスティ、というのがだいたいメニューの区別らしい。この地域で話されるマレー語方言には、頻繁にタイ語が混じる。私はほとんどマレー語がわからず、会話のなかの言語切り替えの感覚をつかむことは難しいが、話に混じるタイ語を追うだけでもなんとなく会話が理解できるのがおもしろい。

最近はこうした喫茶店だけでなく、まさに日本語で「カフェ」と呼びたくなるような、若者がつくる空間も増えている。その一つとして、パタニ県の旧市街に位置するIn_t_af Cafe' & Galleryがある（写真8）。南部国境地域でも、何かを発信したい若者や芸術家がつくるアート・スペースは着実に増えている。タイに居て感じるのは、こうした開かれた空間づくりが非常にうまいということである。

最後に、2年半前に一度訪れたきりだが、この地域の喫茶店に惹かれるきっかけとなった店がある。パタニ県ヤリン郡にあるこの店には、近所の人々がテレビでサッカーをみて、学校帰りの小学生がおやつを食べ、女性たちはせっせと飲み物を作る、実際に体験したことはないが昭和の下町にタイムスリップしたかのような時間が流れていた（写真9、10）。先ほ

どの2つのタイプの喫茶店が、出かけて行って友達や恋人と語らう場所なら、こちらは周辺住民の日常そのものという趣であった。

人が集まり、語らう空間には、おいしいものがあると良い。私は、お茶とおしゃべり好きがたくさんいるこの地域に来ると、なんとなくほっとする。



写真8 In_t_af Cafe' & Gallery



写真9 パタニ県ヤリン郡の喫茶店 (1)



写真10 パタニ県ヤリン郡の喫茶店 (2)

まなべ ゆうこ／東京大学大学院総合文化研究科博士課程。

2015年4月～2017年4月まで在タイ日本国大使館専門調査員。
地域紛争の解決と補償を研究。